

群馬の養蚕と暮らし

Sericulture and People's Living in Gunma Prefecture

講師 板橋 春夫

（國學院大學兼任講師）

冒頭、受講者に「上毛かるた」の養蚕製糸織物に関わる読み札について質問した。「①」と生糸は日本一」「日本で最初の②」「県都前橋③の市（まち）」「桐生は日本の④」「⑤織出す伊勢崎市」の五問（答えは①繭、②富岡製糸、③生糸（いと）、④機どころ、⑤銘仙）。群馬の人が多かったので良くできた。他県の方は私と回答者との掛け合いに驚いていた。次に養蚕語彙について質問した。こちらは数名が答えるだけで、学生をはじめとする若い世代は、聞いたことがないという状態であった。ちなみに質問した用語は、①ドドメ、②クワゼ、③アツガイ、④ズー、⑤タママユ、の五つである。

ドドメは桑の実の方言である。食べると口の中、特に舌が紫色になり、私が子ども時代、夏に長くプールに浸かっていると唇が青紫色になる。あれをドドメ色と称した。クワゼは葉をとった後の桑の条である。良く乾燥させて燃し木にした。アツガイはさすがに難しかったようである。漢字にすると「厚飼い」で、籠の中が熟蚕で所狭しという状態を指す。現代風に言えばラッシュアワーの電車の中であろうか。ズーは熟蚕のことである。歳をとったことを「もうズーになっちゃったい」などと言った。タママユは玉繭で、二つの蚕が一つの繭を作ったもので、普通の繭よりも大きく品質は等外である。実はこのタママユが高級な紬の原材料となるのである。

質問に対する低正解率は、養蚕文化が過去のものという観があった。しかし養蚕県群馬では、養蚕の歴史や生活を抜きに人びとの暮らしを語ることはできない。養蚕は桑の葉を食べ成長する昆虫の蚕を養育することで、蚕は、卵・幼虫・蛹・蛾と四つの変態過程を経て一世代を完了する。蛹の時代は外敵から身を守るために繭を作るが、人間はこの繭の中の蛹を殺すことにより糸を取るののである。蚕のいのちをいただいて人びとはシルクを作った。そのシルクこそ群馬の生活文化、そして近代日本の経済を支えてきたのである。

高崎だるまは、養蚕と深い関係がある。乾燥した群馬の気候風土がだるまの生産に適し、しかも養蚕の盛んな地域であることから、だるまは多くの養蚕農家に受け入れられた。蚕が脱皮し桑を食べ始めることを「起きる」、上蔭を「上がる」という。だるまの起き上がりは、蚕に関する語呂合わせで、だるまは養蚕飼育の象徴であった。養蚕が盛んな時代、だるまに「蚕大当り」と書き込ん

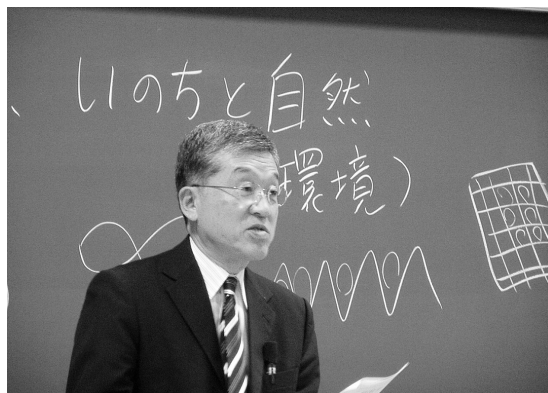
だが、現在は「家内安全」「商売繁昌」「交通安全」などの文字が書かれる。養蚕が天候や病気に大きく左右され、豊凶が一定しない時代にあつては、少しでも不安の種を減らそうと、人びとはだるまに願いを込めたのである。このほか小正月の繭玉、二月初午の繭団子、養蚕による盆の日取りの変更など、養蚕は群馬県民の生活文化に深い影響を与えてきた。

養蚕農家では、この昆虫をオコサマ（御蚕様）と敬称を付けた。明治後期まで春蚕だけの年一回だけの飼育だったが、蚕種改良に励んで年五回の飼育が可能になった。近代の蚕種改良や技術革新は、日本の養蚕業の飛躍的な発展をもたらした。一方、天候不順による桑の収穫不能や蚕の病気など蚕の投棄問題が生じ、人びとは飼育にあたって、蚕の無事成長を身近な神仏に祈ってきた。技術、労働、そして信仰という構図の一例として、オキヌサン人形と猫絵を取り上げた。

伊勢崎市境島村に伝わるオキヌサン人形は、養蚕業を支えた漂泊労働者であるカイコビヨウ（蚕日雇）のお絹さんという女性がモデルとされる。お絹さんは器量良しで、赤いタスキに赤い前掛けをかけて蚕の手伝いに行くと、その先々で不思議と蚕が当たった。境島村の蚕種製造家は競ってお絹さんに来てもらった。ある年、養蚕シーズンになってもお絹さんの姿が見えない、恐らく結婚したのだらうと村人はうわさし合った。お絹さんを毎年雇っていた家で、仏壇に供え物をしたところ、白蛇が出てきた。お絹さんは白蛇になったのだと話し合い、以来、お絹さんの代わりに人形を作り豊蚕を祈った。オキヌサン人形は、神奈川県相模原市鎮座の皇武神社の神主が明治中期に広めたものである。境島村のオキヌサン人形は、この信仰圏の北限にあたり、養蚕労働者の実態を示す貴重な資料である。

また、蚕の大敵である鼠をよける一方法として猫絵が流行した。岩松新田の殿様が描いた猫絵は、「八方にらみの猫」「万次郎の猫絵」と呼ばれ、鼠よけの効能があるとして農民に受け入れられた。特に明治初年、海外に輸出する蚕種に猫絵が添付されて送られたので、新田俊純は動物愛護の男爵としてバロンキヤットのニックネームを与えられた。江戸時代の岩松新田氏は、困窮していたので、求めに応じて猫絵をはじめた皆さんの墨絵を描いた。猫絵は時代を反映するものであり、新田義貞の末裔という貴種性がもてはやされた背景には、近世後期以降の養蚕業の興隆があつたのである。

平成24年10月15日 於 2号館211教室



講演する板橋氏